

鹿児島大学病院歯科の今後

著者	鳥居 光男
雑誌名	鹿児島大学歯学部紀要
巻	29
ページ	3-3
発行年	2009
URL	http://hdl.handle.net/10232/16998

鹿児島大学病院歯科の今後

副病院長 鳥居光男

前号で歯学部の講座再編について触れたので、今回は病院について述べさせていただきます。

平成20年度、歯学部創設30周年に合わせたかのように、念願であった桜ヶ丘地区の病院再開発がスタートした。大学の独立行政法人化にさきがけて医病と歯病が統合した目的が、医病の建て替えのためであったので、やっと当初の目的が実現したことになる。しかし、国家財政の悪化から、最初計画された全面建て替えツインタワー構想は望むべくもなく、増築と改修による再開発となった。

病院を動かしたまま再開発をするため、増築、移設、空いた部分の改修を繰り返す。歯病については病院統合後の最大の問題点は医病と歯病が300m離れていることで、これを解消するために現在の医病外来棟の東側に歯科の新外来棟が建設される（写真参照）。3階建てで1階が下駄履き、2、3階が歯科外来になり、合計床面積3,600㎡（現医病の病棟の一部を含む）が計画されている。現在の歯病が約9,000㎡であるので極端に狭くなる勘定であるが、手術室、事務部、薬剤部、検査部等医病と共通の部分は医病に、病棟は現在の医病の病棟東端（結核・感染症病棟の跡地）に建てられる新病棟（写真参照。ただし、病棟の外形は検討中で、変わる可能性有り）に移るので、今の外来診療室のみの面積程度が確保されたことになる。再開発が先行している他大学では、医歯合同の病院が建てられ、その一部のフロアーが歯科に割り当てられている。しかし、床下構造など医科と歯科では設計が大きく異なり、苦労しているとのこと、本学では歯科のみの外来棟であるのでその点はありがたく思っている。

いつ歯病が移転するかということについては、できるだけ今の設備を有効に利用する観点から、再開発計画の最後に新外来棟が建設され、完成後に歯科の全て（外来、病棟、手術部門）が一度に移転する計画であり、いまから8～9年後になる予定である。

さて、移転はまだまだ先の話で、設計すら始まっていないが、歯科の中では新外来棟をどう使うかについての検討を始めている。現在の外来診療室の床面積が確保されたと言っても、通路、受付、トイレ、階段等を設けると、診療スペースは当然現在より狭くなる。

従って、診療ユニットを現在の150台から100台前後にまでは減少させる必要がある。現在の1日外来患者数からはこれでもやってゆける計算である。そうなると現在のように各診療科が各個に診療室を持っているという形は、壁・通路等のスペースがあるので不可能で、できるだけ大きいひとかたまりの大診療室になる。例えば成人系、外科系、発達系がそれぞれひとかたまりになり、各科の境界は共用ユニットにして効率的に運用することが考えられている。いまでも上記の3系はそれぞれがセンター化されている。医病も名目上は臓器別にセンター化されているが、実際には従来の枠組みで動いている。しかし、病院再開発が終了した暁には実体としてもセンター化が実現する予定である。その際は歯科も実体としてセンターとして動くようになる。また、現在でも19の専門外来が登録されているが、専用の診療室を持っているものはない。いくつか専門外来診療室も必要であろう。さらに、移転により研究室と診療室が建物群の東端と西端に分かれることになるので、今のように簡単には両室間を行き来できない。そのためにある程度の控え室が必要となり、その面積も必要となる。

いずれにしても新しい外来棟をどのようにすればいいのかについては、ここ数年を掛けて慎重に考えなければならない。病院の新築など数十年に一度あるかなんかの機会である。いまや建物は改修して百年使えという時代である。まさに、前報で書いた、講座再編・増設などもからめ、歯学部百年の計をたてる事になる。

